

こころの医療のすそ野は広がったが……

宮岡 等

街では精神科クリニックの看板を目にする機会が増え、クリニックの開業はなお増加傾向にあると聞くし、精神科や心療内科外来を設置する総合病院も増えた。病院ではなく、カウンセリングを専門とする施設もある。ここ数年でこころの医療のすそ野は確実に広がっており、誰でも気軽にこころの医療を受けられる環境が整いつつある。

しかし、最近気になる問題があった。夜間に精神科救急を受診した者の中に、クリニックに通院しているが、具合が悪くなって電話をすると夜は留守番電話になっていったという事例が相当あるらしい。クリニック通院患者さんの症状が急ぎの入院治療が必要なほどに増悪しているのに、紹介先の病院のベッドの空き状況すら確認せず、「入院よろしく」式の紹介状を患者さんに持たせるだけで受診させた医師もいた。カウンセリング継続中に症状が悪化したとの理由で、「後はよろしく」式の紹介状一枚持たせただけで病院受診を指示したカウンセラーにも出会った。

いくらこころの医療のすそ野が広がっても、治療を途中で投げ出すかのような医療やカウンセリングはいかなるものであるのか。クリニックが夜間も電話で対応し、連携のとれる有床病院をあらかじめ確保しておくことはそれほど難しいことではない。クリニックの診療やカウンセリングで対応できる精神症状に限界があるのは自明であるから、あらかじめ相談できる有床病院や精神科医を確保し、適切な連携の下で入院や外来治療を勧めることも可能であろう。

誰でも気軽に利用できるこころの医療という美名の下で、症状が重くなった場合への対応が遅れているとすれば、きわめて由々しいことである。病院機能評価が話題になる昨今、こうした対応能力も指標に置いて、クリニックやカウンセラーを評価できないものであるだろうか。また受診者がこのあたりの情報まで参考にして医療機関を選べるシステムが早くできれば、と思う。